

1. 金子さんの主な著書

「ヘディン伝」「ヘディン交友録」「中央アジアに入った日本人」（以上、中公文庫）
「動乱の中央アジア探検」（朝日文庫）
「文明の中の辺境」「アフガンの光と影」（以上、北宋社）
「西域 探検の世紀」（岩波新書）
「天山北路の旅」（連合出版）
「ヤングハズバンド伝」（白水社）
「宮沢賢治の歩いた道」（れんが書房新社）
「タイの黄金仏 = TAI Gold Bronze ART」（USS 出版） その他。

共著・編纂など

「ボロブドールの滅んだ日 インドネシアの古代遺跡」 金子史朗共著 （胡桃書房）
「寺本婉雅著作選集」 横地祥原 監修、金子民雄 編（うしお書店）
「能海寛著作集」 全 14 巻 金子民雄 監修（うしお書店）

主な訳書

ヘディン「チベット遠征」（中公文庫）
マカートニ夫人「カシュガール滞在記」（連合出版）
キングドン=ウォード「ツアンポー峡谷の謎」（岩波文庫）
ユアンズ「アフガニスタンの歴史」（監修、明石書店）
オマル・ハイヤーム「ルバイヤート」（胡桃書房）
マリー・ミルズ・パトリック「サッフオー ギリシャの女流詩人」（胡桃書房） その他多数。

その他 解説記事など多数。

2. ペルシア、ペルシャ の概要と歴史 （ウィキペディアから転載、下記 URL をご覧ください。）

ペルシア、ペルシャ（ギリシャ語 Περσία[1]）、ペルシャは、現在のイランを表す古名。漢名は波斯（はし）・波斯国（はしこく）。波斯と書いてペルシャ、ペルシャと読ませることもある。イランの主要民族・主要言語の名称でもある。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%82%A2>

3. スヴェン・ヘディン （ウィキペディアから抜粋して転載、下記 URL をご覧ください。）

1905 年、ペルシアからインドに入り、レーから西北チベットに侵入、中央チベット湖沼地帯を探検してインダス川、サトレジ川(インダス川支流)、ブラマプトラ川（ガンジス川支流）の水源地方を調査。シガツェに至ってパンチェン・ラマの歓迎を受けた。サトレジ川の河源およびヒマラヤ山脈の北にあってこれと平行し、カラコルム山脈に連なるトランス・ヒマラヤ山系の発見は、この調査旅行で最も意義ある業績である。カイラス山へも訪れたが、チベット人に入山を禁じられている。これらの成功は、パトロンであるロシア皇帝ニコライ 2 世との個人的な友情なしには成功はなしえなかった。また、ノーベル家の援助も受け、その関わりは生涯に渡った。1908 年に帰国。

日本語伝記 ； 金子民雄（1936-）による著作がある。上記邦訳書も一部、訳・編集に当たった。

『ヘディン伝 偉大なシルクロードの探検者』 新人物往来社 →中公文庫、1989 年

『ヘディン人と旅』白水社、1982 年 →『ヘディン交遊録 探検家の生涯における 17 人』中公文庫、2002 年

『秘められたベルリン使節 ヘディンのナチ・ドイツ日記』 胡桃書房→中公文庫、1990年

ヘディンの経歴・主著・日本との関わり等について、下記をご覧ください。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%98%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%B3>

スウェーデン民族学博物館所蔵のチベット探検の写真集（関連リンクより）

<http://www.flickr.com/photos/23258207@N08/sets/72157609994133531/>

「インドへの陸路」ヘディン著

1905年10月から1906年6月にかけて行われたヘディンによるペルシア沙漠横断旅行の旅行記。ヘディンはこのとき、チベット探検を行うべくスウェーデンのストックホルムからインドへ赴く途上にあっただが、海路で直行するルートではなく、陸路でペルシア沙漠を横断する行程を取った。この探検はテヘラン以東に広がるケビール（塩沙漠）の踏査を目的としていたが、イランの風土と民族についても詳細な記録を含んでいる。 <http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/VIII-1-E-37/>

4. バンベリ関連

http://en.wikipedia.org/wiki/%C3%81rmin_V%C3%A1mb%C3%A9ry

5. オーレル・スタイン（ウィキペディアより抜粋して転載）

東トルキスタンを中心とした探検

1900年、東トルキスタン地域へ第1回の探検旅行に出発する。新疆省を探検し、ホータン近郊のニヤ遺跡を発掘調査した。1904年1月には、インド古跡調査局（Archaeological Survey of India）入りをしている。1906年には第2回の探検を行い、敦煌の仏画・仏典・古文書類、いわゆる敦煌文献を持ち帰った。1910年、業績によりC.I.E.（Companion of the Indian Empire）に、1912年にはK.C.I.E.（Knight Commander of the Indian Empire）に叙せられ、Sirを称することを許可された。1913年 - 1916年には、第3回のハラホトよりイラン東南部を経てインダス川上流に至る地域の調査旅行をおこなった。

調査報告書

Ancient Khotan（1907年）

山口静一・五代徹訳注（全訳）『砂に埋もれたホータンの廃墟』白水社, 1999

松田壽男抄訳『コータンの廃墟』新版が中公文庫, 2002年

Ruins of Desert Cathay（1912年）

Serindia（1921年）

Innermost Asia（1928年）邦訳は、数度改装され刊行。

沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』白水社, 初版1966年／復刊2004年ほか

西アジアを中心とした探検

1926年、インダス川上流及びスワート川流域を調査旅行し、アレクサンドロス大王のインダス渡河地点、ウディヤーナ遺跡などを調査した。1930年には、第4回の中央アジア探検を申請したが、国民政府の許可がおりなかった。同年、日本を訪問している。その後は、西アジアの調査を行い、1927年 - 1938年にイランを調査し、モヘンジョ・ダロおよびハラッパーのインダス文明とメソポタミア文明との関係性を実証した。1938年 - 1939年にシリア、ヨルダンから北西イラクにかけてのローマ長城の調査をおこなった。

調査報告書

Archaeological Reconnaissances in North-western India and South-western Iran (1937 年)

An Archaeological Tour in the Ancient Persia (1936 年)

Old Routes of Western Iran (1940 年)

『アレクサンドロス古道』、同朋舎出版, 1985 年

(アッリアノスも訳されている)、前田龍彦訳

『アレクサンダーの道』、白水社, 1984 年

谷口陸男・沢田和夫訳、長沢和俊注・解説

1943 年 10 月には、カシミールよりペシャワールを経由してアフガニスタンのカーブルに到着、バーミヤン遺跡を始めアフガニスタンを組織的に発掘することを計画したが、そこで病没した。カーブル郊外にはスタインの墓がある。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%AC%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%82%A4%E3%83%B3>

6. 吉田正春と古川^{のぶよし}宣^{のぶよし}誉 (ウィキペディア「吉田正春」の項より抜粋して掲載)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%89%E7%94%B0%E6%AD%A3%E6%98%A5>

吉田正春は、1852 年 6 月 6 日、土佐藩参政（上士）吉田東洋の嫡男として、高知城下に生まれる。吉田は、1880 年（明治 13 年）外務省理事官に任ぜられる。同年 4 月 6 日、外務卿井上馨より、ペルシア（現 イラン）と日本との国交樹立や貿易の準備のための情勢調査の命を受けて、**外務省御用掛吉田正春を正使、陸軍工兵大尉の古川宣誉を副使**とし他に商社大倉組の横山孫一郎らの商人たちと軍艦比叡（艦長伊東祐亨）に乗り出航する。

1880 年（明治 13 年）7 月、インド人の通訳や、ペルシア人の料理夫などを含めた総勢 10 人の使節団を率いて、ペルシア湾岸のブーシェフルから、駱駝に跨がってイラン高原を北上、シーラーズを通り、ペルセポリスなどの遺跡や、エスファハーンを経由して、9 月 10 日、首都のテヘランに到着し、9 月 27 日、日本人として初めてペルシアを訪れ、ペルシャ国王ナーセロッディーン・シャーに謁見し通商開始の許可を得た。続いて、12 月 30 日テヘランを発ち、カスピ海を渡り 1881 年（明治 14 年）2 月 12 日、イスタンブルに到着し、日本人として初めてトルコ皇帝（アブデュルハミト 2 世）に謁見した。その後、ウィーン、サンクトペテルブルクを通して帰国している。その後法制局に転じて、1882 年（明治 15 年）、大日本帝国憲法の制定準備のために伊藤博文が欧州を見学することとなり、正春も随行して渡欧する。古川宣誉の著書； 参謀本部編『波斯紀行』参謀本部、1891 年。（『明治シルクロード探検紀行文集成. 第 2 巻』ゆまに書房、1988 年、所載）

7. 福島安正 (ウィキペディアより抜粋して転載)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E5%AE%89%E6%AD%A3>

1886 年（明治 19 年）にはインド、ビルマ方面を視察の上、翌 1887 年にはドイツのベルリン公使館に駐在、公使の西園寺公望とともに情報分析を行い、ロシアのシベリア鉄道敷設の情報などを報告する。1892 年（明治 25 年）の少佐時代には、帰国に際し、冒険旅行という口実でシベリア単騎行を行い、ポーランドからロシアのペテルブルク、エカテリンプルクから外蒙古、イルクーツクから東シベリアまでの約 1 万 8 千キロを 1 年 4 ヶ月をかけて馬で横断し、実地調査を行う。この旅行が一般に「シベリア単騎横断」と呼ばれるものである。その後もバルカン半島やインドなど各地の実地調査を行い、現地情報を参謀次長の川上操六らに報告する

8. ペルシア絨毯 (ウイキペディアより抜粋して転載)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%82%A2%E7%B5%A8%E6%AF%AF>

伝統的にペルシアと呼ばれていた現在のイラン周辺で生産され続けている絨毯。ペルシア文化、芸術を代表する極めて優れた美術工芸品の一つで、その起源は紀元前の古代ペルシアにまで遡ることができる。床面の敷物だけでなく、壁飾りやテーブルクロスとしても用いられていた。

現存している最古の手織り絨毯として、アケメネス朝ペルシアで制作されたと見られる、古代文明パジリクで発見されたおよそ 2500 年前の絨毯がある。ペルシア絨毯の最初の記録は古代中国のもので、224 年から 651 年のサーサーン朝ペルシア時代の記録である。7 世紀にイスラム教圏となるまで、ペルシアでは様々な王朝が勃興、衰退を繰り返し、ペルシア絨毯にも多くの変化をもたらされたが、ペルシア絨毯の生産は途切れることなく続いていた。その後、13 世紀のモンゴル帝国によるペルシア侵攻のためにペルシア絨毯は衰えていたが、イルハン朝ペルシア、ティムール朝ペルシアのもと、ペルシア絨毯は再び発展していくことになる。

ペルシア絨毯に使用される羊毛、絹、綿といった天然素材は、経年変化によって腐食し、朽ちてしまう。このため、考古学者たちの古代遺跡調査によっても、ペルシア絨毯に関する有益な発見がなされることは極めてまれである。古代からペルシアで手織りの絨毯が制作されていたことを示す証拠は、数点の磨りきれた絨毯の断片しか存在しない。

ゾロアスター教時代 紀元前 5 世紀頃のパジリク絨毯。現存する最古の絨毯である。(図示省略)

1949 年に、シベリアのアルタイ山脈のパジリク古墳群から、考古学史上非常に貴重な絨毯が発見された。この絨毯はスキタイ人の王族とみられる人物の墳墓から発掘されたものである。放射性炭素年代測定により、この絨毯が紀元前 5 世紀のものであることが判明している。絨毯中央部は深い赤に彩られ、周囲を巡る二本の縞模様部分にはシカとペルシア人騎手が表現されている。このパジリク古墳群から出土した絨毯は、遊牧民族たるスキタイ人の手によるものではなく、アケメネス朝ペルシアで制作されたものだと考えられている。

アケメネス朝ペルシアの初代国王キュロス 2 世はパサルガダエに王都をおき、その宮廷内は豪華な絨毯で飾り立てられていた。6 世紀まで、羊毛や絹で織られたペルシア絨毯は歴代の王朝で発展し続けていった。サーサーン朝ペルシア国王ホスロー1 世が織らせた有名な『春の絨毯 (en:Baharestan Carpet)』は、王都クテシフォンにあった王宮の主謁見室の装飾に使用されたものである。この『春の絨毯』は絹織りで、金、銀、貴石が使用された長さ 140 メートル、幅 27 メートルという大規模なもので、楽園のような華麗な庭園が表現されていた。その後 637 年にアラブのイスラム諸国に王都が占領されると、略奪された『春の絨毯』は小さく切り分けられて、戦利品として兵士たちに与えられた。

イスラム教時代

8 世紀にはアーザルバーイジャー地方が、ペルシア絨毯と粗織りの絨毯の一大産地だった。また、タバリス地方は、租税として年間 600 枚の絨毯をバグダートのカリフの宮廷に納めていた。当時のペルシアの主要な輸出品は絨毯で、祈りを捧げるときに足元に敷く小さな絨毯の割合も多かった。

セルジューク朝ペルシアからイルハン朝ペルシアでも、ペルシア絨毯の制作は非常に活発に行われており、イルハン朝の第 7 代国王ガザン・ハンがタブリーズに建てたモスクは、豪華な絨毯で埋め尽くされており、絨毯の素材となる羊毛は、特別に飼育された羊からとられたものが使用されていた。ペルシアにモンゴル帝国が襲来するまで、ペルシア絨毯の制作は大いに発展していった。この時代に制作されたペルシア絨毯でもっとも有名なものがサファヴィー朝ペルシアで織られた、現在ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館が所蔵する『アルダビール絨毯』である。

この絨毯は対として制作されたもので、もう 1 枚の『アルダビール絨毯』は、ロサンゼルス・カウンティ 美術館が所蔵している。

現代 ルーヴル美術館に展示されているペルシア絨毯。(省略)

2008 年にイランが輸出した手織りのペルシア絨毯の総額は 4.2 億米ドルで、これは世界の絨毯市場のおよそ 30 パーセントに相当する額である。イランで国内用と海外輸出用の絨毯産業に関係する人口はおよそ 1,200 万人ほどだといわれている。イランがペルシア絨毯を輸出している国は 100 カ国を超えており、手織りの絨毯の生産、輸出では世界最大の国である。これは全世界で生産される手織り絨毯の 4 分の 3 を占める規模であり、原油以外のイランにおける主要な輸出品となっている。近年のペルシア絨毯は、伝統的なペルシア絨毯のデザインを模倣して安価な代用品を製造する、競合諸国との激しい競争にさらされているのが現状である。

2001 年に完成した、[オマーン](#)のスルターン・カブース・グランド・モスクに収められているペルシア絨毯の総面積は 4,343 平方メートルで、600 人の職人が 4 年かけて制作したものだ。

9. お茶 <http://www.chasou.com/3dictionary/04iran01.html> より抜粋して掲載。

お茶の事典

[・インドチャイ](#) [・アッサム紅茶](#) [・ダーズリン紅茶](#) [・ネパール紅茶](#) [・イラン紅茶](#) [・中国茶](#) [・台湾茶](#) [・南米茶](#)



イラン紅茶



イランチャイとは



イランだけではなく中近東で広く飲まれているチャイは、インドなどの南アジア圏のミルクで煮出したチャイとは違い、ストレートを濃く出し、お湯で割り、砂糖で甘くして飲まれています。

イランで多く見かける飲み方はチャイグラスに入っている熱いチャイをソーサーにあげ、そこからすすって飲みます。その際に口には角砂糖（または氷砂糖）を直接含み、少しずつ溶かしながら飲みます。これがなかなか難しく、慣れないとすぐに砂糖は溶けてなくなってしまいます。

トルコや他の中近東などでは砂糖はチャイグラスに入れ、最初に溶かしてから飲む方が多いようです。その際は一杯のチャイグラスに 2 つ以上の角砂糖を溶かすと中近東のチャイらしい甘さになります。

❖ ラヒージャーン カスピ海の紅茶！



イランの紅茶ラヒージャーンはイラン北部カスピ海沿岸のギーラン州、ラヒージャーン近郊で栽培されている茶葉です。中近東のチャイに最適で、ストレートで飲むよりも砂糖を多めに入れることで他の茶葉では味わえない、中近東のチャイをお楽しみいただけます。

<イラン風チャイの飲み方>

茶葉 2.5 グラム(ティースプーン約 1 杯半)に対し 200ml の熱湯

1. 熱湯をポットとカップに注ぎ、温めておく。
2. 温めたポットに茶葉を入れ、熱湯(約 95 度)を勢いよく注ぎ蓋をする。
3. 5 分以上待ち、温めたカップに注ぐ。

中近東風のチャイはサモワールなどで保温し、長時間おいておくことが多く、ストレートで飲むには渋いので、お湯で割り、砂糖を多めに入れて飲みます。ラーヒージャーンのお茶も同様に 5 分以上の時間をかけて、濃く出し、お湯で割って飲むことをおすすめします。その際チャイグラスを使用し、砂糖を口に含みながら飲むのが、イラン流です。

* 2 杯以上の場合 1 杯増えるごとに茶葉も 1 杯(2g 弱)を追加してください。

セイロンホールリーフ



セイロン茶葉はイランのチャイに主に使われるもので茶葉の大きさは中国茶のように大きく、サモワール（2段のヤカンのようなもの）の上のにせ、濃くなった紅茶をお湯で割りながら飲むのに使用されます。

10. 悠久のペルシャ～現代イランの成り立ちとその素顔

イラン・イスラム共和国基礎データは、 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/iran/data.html#01>

以下、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol51/> より抜粋して転載。

最近、ウラン濃縮活動など核問題のニュースでよく耳にする「イラン」。ペルシャ帝国繁栄の歴史を

受け継ぎながら、独自のイスラム国家を築いてきたイランとは、一体どのような国なのでしょう。これまでの歩みを振り返りながら、現代イランの成り立ちと社会情勢、日本との意外な共通点などについて見ていきます。

■イランはペルシャ帝国繁栄の舞台

イラン・イスラム共和国は、今から歴史をさかのぼること約2500年、古代オリエント世界を統一する大帝国を築いたアケメネス朝ペルシャ（紀元前540年成立）が興った場所でした。アケメネス朝の後、226～651年にわたって栄えたササン朝ペルシャ時代には、シルクロードを経由して、遠く日本とのつながりも生まれました。奈良・正倉院に収蔵されているガラス器「白瑠璃碗」は、往時のペルシャ帝国の繁栄をしのぶ品として有名です。現在のイランは、日本の4.4倍（約165万平方km）の広大な国土に、7,000万人以上の人々が暮らす地域大国です。ペルシャといえば、「砂漠」に「ラクダ」のイメージが強いかもしれませんが、首都テヘラン（Tehran）などイラン北西部はとても緑豊かな高原が広がっており、中東最高峰のダマーヴァンド山（標高5,604m）をはじめとする4,000m級の山々も連なっています。冬には国内外からスキーヤーが集まるスキー場もあります。カスピ海沿岸地方では、水田による稲作も行われています。



夕焼けに映えるペルセポリス（アケメネス朝ペルシャの都）



■ペルシャから世界へ

「ペルシャ」と名のつくものの中で、まず連想されるのが「ペルシャ絨毯」「ペルシャ猫」などですが、ペルシャ絨毯は紀元前7世紀頃にはイランの主要産業として確立し、中東一帯の宮廷で装飾品として珍重されていました。すべて手織りのため同じものは二つとない上、品質の高さと文様の華麗さ

は、今も変わらず世界中を魅了しています。意外と知られていないペルシャ発祥のものに「古典音楽の楽器」があり、ペルシャの打弦楽器「サントール」は、ヨーロッパに伝わって「ピアノ」のルーツになったと言われています。また、[ペルシャ語](#)も世界各地に伝わり、例えば、英語のレモン (lemon) とライム (lime) はペルシャ語のリームー (limu) から、パラダイス (paradise)、シャーベット (sherbet)、キャラバン (caravan)、市場 (bazar) など、もペルシャ語からきた言葉です。世紀を超えて世界に影響を与えてきたペルシャの面影は、[ユネスコの世界遺産](#)「ペルセポリス」



最古のペルシャ絨毯は約2,500年前にさかのぼることができる。

「イスファハンのイマーム広場」などの歴史的遺跡に凝縮されています。

■イランの近代化とイスラム教

現在のイランはイスラム教国家ですが、もともとササン朝ペルシャの時代までは、イラン中央部の都市ヤズドが発祥とされるゾロアスター教の国家でした。イスラム化が進んだのは、ササン朝滅亡後、モンゴル帝国の侵攻などを経て、1501年にイスラム教シーア派を国教とするサファヴィー朝が成立して以来のことです。しかし、1925年、クーデターによってパフラヴィー朝を開いたレザー・ハーンは、政治の非宗教化などによってイランの近代化を進める政策を急速に進めました。それは、イランを「脱イスラム化」路線に転換させるもので、



タイルを使った幾何学模様で美しく装飾されたモスク (イスラム寺院)

1936年にはイスラム女性が全身を覆うために着る黒い布「チャードル」の着用禁止令を出し、代わりに洋服着用令を発令、さらには、後継の国王が1962年から農地改革、婦人参政権、識字運動を進めていきました (白色革命)。しかし、この急激な改革は、秘密警察などを伴った強権的なものでもあったため、結果として国民の強い反発を招くこととなりました。そして、それが後にイスラム革命を引き起こす要因となりました。

■イラン・イスラム革命とホメイニ師

近代化、脱イスラム化を旗印とする「白色革命」が進む中、国王批判を展開したホメイニ師 (後のイスラム共和国の初代最高指導者) は、政府によって逮捕され、後に国外へ追放されました。国民はこれを宗教弾圧だとして不満を募らせていき、1978年、ついにこの不満が表面化しました。ホメイニ師を中傷する記事を巡る暴動を皮切りに、国内各地で暴動が相次ぎ、次第に民主化を求める勢力や左翼勢力も巻き込んで、大規模な王制打倒運動へと発展していきました。軍とデモ隊が衝突し死傷者が出る事件も起こり、事態収拾に行き詰まった国王は翌1979年、国外に退去。国王と入れ替わる形で、ホメイニ師が15年ぶりに母国イラ

近代イラン略史	
1908年	油田発見
1925年	パフラヴィー朝成立
1936年	チャードル着用禁止令 洋服着用令
1951年	モサッアグ首相、国内で英国石油会社の資産を国有化
1953年	軍部クーデターにより国王が権力を握る モサッアグ首相失脚
1962年	白色革命 (脱イスラム化政策) が始まる ホメイニ師逮捕 (後に国外追放)
1978年	テヘランなどで大規模暴動
1979年	イラン・イスラム革命、ホメイニ師帰国
1980年	イラン・イラク戦争勃発 (1988年停戦)
1989年	ホメイニ師死去、ハメネイ大統領が 最高指導者に就任

ンへ帰国し、パフラヴィ朝に代わる「イスラム共和国」の設立を宣言しました（イラン・イスラム革命）。革命後、新政権はパフラヴィ朝をバックアップしていた米国との対決姿勢を強め、両国の関係は急速に悪化していきます（1980年、国交断絶）。一方、周辺のイスラム諸国（主にスンニ派）は、厳格なシーア派国家となったイランからの「革命の輸出」に対する警戒感を強めました。この結果、イランは欧米諸国だけでなく、イスラム諸国の中でも次第に孤立を深めていくことになりました。

■ 高学歴化する現代ムスリム女性たち

イラン・イスラム革命後に表れた変化のひとつに、「女性の活躍」があります。一般的に、イスラム社会では女子教育に消極的なケースが多いとされていますがイランではイスラム教の教義に基づき、「男女隔離政策」を徹底した上で、女子校の増設や女性教諭の育成・派遣など女子教育にも力を入れてきました。こうした取組が、「男性の目に触れるのではないか」という両親の懸念を払拭し、都市部だけでなく、保守的な地方農村などでも女子教育が浸透したと言われています。



医療に従事するイラン女性

また、イラン・イスラム革命から約30年が経過した現在、イランでは大都市を中心に女性の高学歴化が進み、教育や医療をはじめ多くの分野で女性が活躍するようになりました。企業の管理職や閣僚、国会議員にも、少数ながら女性の姿が見られるようになり、女性専用タクシー会社の設立や女性のバス運転手採用なども話題となっています。

■ 石油、国境、イラン・イラク戦争

そして、イラン・イスラム革命から間もない翌1980年、イランが再び国際社会の注目を集める出来事が起こります。それが「イラン・イラク戦争」です。争いの発端は、両国経済を支える「石油」の輸出の要所で、国境付近を流れる「アルヴァンド川（シャトル・アラブ川）」の使用権をめぐる衝突でした。この時、米国、欧州、ソ連などは、敵対するイラクのサダム・フセイン政権を強力に支援。1988年に停戦が成立するまで、攻防が続けられました。8年間に及んだイラン・イラク戦争は、両国に多くの犠牲と経済的損失をもたらしただけでなく、中東地域、ひいては国際社会の安定にも大きな影を落としました。なお、この戦争からわずか2年後の1990年、今度はイラクがクウェートに軍事侵攻し、米国など多国籍軍との間で「湾岸戦争」が始まった。



■ イラン人の“ジャパニーズ・ドリーム”

イラン・イラク戦争の停戦後、イラン政府は復員兵士の雇用促進を図るため、海外への「出稼ぎ労働」を奨励しました。当時、バブル経済に沸いていた日本では円高が進んでおり、イランの人々にとって、日本はとても魅力的な出稼ぎ先でした。さらに、日本とイランは石油貿易などで経済的結びつきが強く、査証免除協定によって「ビザなし」で入国ができたため、「日本へ行けば、将来豊かな生活が送れる」という“ジャパニーズ・ドリーム”がイラン人の間に広まってきました。このため、1990年頃には多くのイラン人が出稼ぎのためにやってきました。しかし、一部のイラン人による麻薬取引や偽造テレホンカード売買など違法行為が後を絶たず、1992年、査証免除協定は一時停止されました。

■ ウラン濃縮活動と経済制裁

さらに、2002年以降、再び国際社会でイランの動向が注目されるようになったのが、現在も新聞やテレビのニュースなどで頻りに報じられている核兵器開発疑惑です。イランのアフマディネジャード大統領領

は、原子力発電など「平和利用目的」での核開発を主張し、ウラン濃縮活動を続けているとしています。しかしながら、米国などは「核兵器開発の懸念が払拭できない」としてイランを非難し、国連安全保障理事会は制裁措置などを含む決議を採択しています。これに対し、イランは査察の受け入れなど [IAEA（国際原子力機関）](#) との協力を継続していますが、今なお国際社会の理解は得られていません。日本は、この問題が平和的・外交的に解決されるよう、あらゆる場でさまざまな働きかけを行っています。

■イランの石油が支えた日本の成長

では、日本はイランとこれまでどのような関係を築いてきたのでしょうか。世界第2位の石油埋蔵量を誇るイランは、「イランの石油が日本の高度経済成長を支えた」と言われるほど、昔も今も日本にとってなくてはならない存在です。かつて、日本にとっての「最大の原油輸入国」がイランだったという事実が、それを物語っています（現在は3番目）。イランでは、今も石油が国営事業として経済の根幹をなしていますが、これに加えて、近年では天然ガス田の開発（天然ガスの埋蔵量世界第2位）や自動車産業の振興など、石油以外の取組も進められています。



ペルシャ湾の油田設備

■日本人にも通じるイラン人の「心」

日本人とイラン人には、意外な共通点もあります。イランでは、ゾロアスター教の文化習慣が色濃く残っているため、日常生活では、春分の日（毎年3月21日）に新しい年が始まる「ヒジュラ太陽暦」を使っています。3月20日の「年末」には、家族でペルシャ絨毯を洗って大掃除をし、「正月」は親戚の家を集まって新年の挨拶をしたり、子どもにお年玉やプレゼントをあげたりして過ごします。また、日本人が俳句や短歌を楽しむように、イラン人も幼い頃から詩に親しみ、普段の会話の中にも古典詩句をよく引用します。日本の書道によく似たペ



芸術性あふれるペルシャ語の「書」

ルシャ文字の「書道」も盛んです。[ペルシャ語](#)の会話では、「お疲れさまです」「お手を煩わせませす」といった日本的な表現や、「ここは私が払います」「いやいや、ここは私が・・・」といったお約束のやりとりもあります（これらは「ターロフ文化」と呼ばれています）。「おもてなしの心」や「義理人情」「恩義」を大切にするとところも、どこか日本人に通じるものがあり、日本のTVドラマ「おしん」はイラン人の琴線に触れて大ブームを巻き起こしました。

■日本の知恵と技術をイランへ

さらに、日本とイランには共通する社会的課題もあります。その代表的な例として挙げられるのが、「地震」と「環境汚染」です。イランは日本と同じく火山帯に位置しており、2003年12月にはイラン南東部で**バム地震**が発生し、約34,000人の死者を出す大災害となりました。地震大国の日本は、すぐに国際緊急援助隊医療チームの派遣、緊急援助物資の供与、緊急無償資金協力などを実施。さらに、[国際協力機構（JICA）](#)を通じて、地震対策に関する日本の知見を伝えたり、早期被害予測システム開発への協力をしたりしています。また、首都テヘランで深刻な問題となっている大気汚染対策についても、日本の知恵と経験に基づいた技術協力を行っています。2009-2010年は、日本とイランの外交関係が開設されてから80周年にあたり



標高約1,200mの場所にあるイランの首都テヘラン（中央はミラッドタワー）

ますが、シルクロードを超えた交流の歴史はすでに 1000 年以上にも及んでいます。イランの発展、そして、国際社会との協調と安定を目指し、日本はイランとの友好を更に深めていきます。

註； イランからの原油輸入については、文中に「現在は 3 番目」とありますが、これは 2008 年度までの位置付けです。詳細は、下記の資料をご覧ください。2011 年度は、「4 番目」となっています。

11. エネルギー白書 2012　　《第 3 節一次エネルギーの動向、1 項（1）石油　参照ください》

2011 年度の原油の輸入先は、サウジアラビア 31.1%、UAE22.5%、カタール 10.2%、イラン 7.8%、クウェート 7.0%　となっています。

<http://www.enecho.meti.go.jp/topics/hakusho/2012energyhtml/2-1-3.html>

12. イランからの石油供給をめぐる最近の動向について

日本エネルギー経済研究所は、インターネット上に公開した「イランからの石油供給をめぐる最近の動向について」p18～p19 に、2011 年 11 月までの日本の国別原油輸入量の推移をまとめています。

<http://eneken.ieej.or.jp/data/4191.pdf>

13. 産油国別原油輸入量の推移

《出所；経済産業省「資源エネルギー統計年報」、石油連盟「資料統計」》

「石油便覧」（JX 日鉱日石エネルギー編）<http://www.no.e.jx-group.co.jp/binran/data/> から転載しました。<http://www.no.e.jx-group.co.jp/binran/data/pdf/30.pdf>

以上

編集責任；雲南懇話会代表幹事 前田栄三